

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	深田 愛乃
主 論 文 題 名：				
宮沢賢治の「教育思想」 ——近代仏教・大正新教育・農村との関係をめぐる思想史研究——				
(内容の要旨)				
本研究の目的は、宮沢賢治（1896～1933）の教育・仏教・農村に関する実践やテキストを、1910年代～1930年代前半の思想史的文脈に位置づけながら横断的に考察し、明示的には示されていない賢治の「教育思想」を浮かび上がらせることである。これにより、これまで近代日本の教育をめぐる研究で十分には探究されてこなかった近代仏教と大正新教育の関係という領域に切り込み、そのことで現代の教育概念を広げることを試みる。 第一部「賢治と近代仏教」では、近代仏教が賢治の「教育思想」形成に与えた影響について、真宗から『法華経』、そして日蓮主義へという賢治の信仰遍歴を段階的に追うことで明らかにした。 第一章では、賢治を取り巻く真宗とはどのようなものであったのかを論じた上で、宮沢一族と親しく交流した真宗大谷派僧侶・暁あけがらすはや 鳥 敏 から、賢治が思想的な距離をとる過程を検討し、賢治の真宗から『法華経』への信仰遍歴と「教育思想」の萌芽との関わりを明らかにした。暁鳥に言及した賢治の作品「復活の前」と「霜林幻想」を手がかりにすることで見えてきたのは、賢治は、「新世界」の開拓に踏み込めず「現実停立」であるような暁鳥の精神主義的な姿勢に不十分さを感じ、やがて『法華経』や日蓮主義で重視される現実社会への眼差しに目覚めていったということである。そうした眼差しの獲得とともに、「新しい、よりよい世界の構成材料」（『注文の多い料理店』広告ちらし）を提供する一つの手段として童話創作が行われたのであった。精神主義から距離をとる過程で可能となった、自己の内観に留まらない世界や社会への眼差しの獲得は、農学校での経験を通してより実際の意味付けがなされていったと見ることができる。農学校や羅須地人協会での賢治の教育実践は、東北農村に生きる人々の生活の向上を目指し、さらには新たな農村のあり方を構想したものであった。賢治は、新たな文化・文明の創造への志向を自身の中で完結させることなく、童話の読み聞かせや『春と修羅』の贈呈などを通して、農学校生徒たちに授けることを試みたのであった。 第二章では、賢治と法華系在家教団・国柱会こくちゅうかいの関係についての検討を主眼に置き、賢治がどのような過程をたどって日蓮主義を「受容」していったのかという初期段階について明らかにすることに焦点をしばった。その際に手がかりとしたのは、賢治が1920年（大正9）の国柱会入会前後に作成した、田中智学の著書や日蓮遺文からの抜き書き『撰折御文／僧俗御判』しょうしやくごもん そうぞくごはんである。この抜き書きの分析を通して、以下の2点を指摘した。 第一に、賢治は少なくとも国柱会入会前後の時期には、相当に智学の導きに拠りながら日蓮主義の研究を進めていたことを推定できた。それにより最終的に賢治は、智学独自の「世界統一」といった言葉とともにあらわれる折伏主義や、在家仏教論にもとづく僧俗のあり方ではなく、原典に説かれた撰折や僧俗に関する教えを確認するに至った。しかし、このことは必ずしも智学への離反を意味するものとはいえず、むしろ智学の導きに真摯に				

沿っていることを示すものである。第二に、賢治は抜き書きを編む中で、摂折と僧俗の問題に自身のあり方を重ねていたように推測された。摂折の問題に関して、国柱会入会前後の賢治の態度は、書簡の文面にも見られたように友人や家族に強く改宗を迫るものであった。このことは、賢治が智学独自の折伏主義の先に、日蓮が述べる『法華経』を受持する者として守るべき態度としての折伏を確認したことと無縁ではないと考えられる。日蓮の摂折論は、『法華経』常不輕菩薩品の主人公である不輕菩薩の「^{たんぎようらいはい}但行礼拜」を折伏として捉えた点に特徴があった。また僧俗の問題に関して、賢治は智学の著書や日蓮遺文をたどりながら、『法華経』では修行の階位の低いものでこそ受職が達成されることや、父母等に随うのではなく仏法を学び極めることこそが真実の報恩の道であることを確認していった。そして、「正修学解了の僧」の受職に近づくためには、広く人のために説く利他行や「修学解了」が必要であること、「比丘」とは出家という形式上の意味のみを含むものではなく、「真実心」をもつことが重要であることなどを知り得たといえる。このような思考の過程は、智学や日蓮に直情的につき従い、日蓮主義の側面を取り出すという短絡的な受容ではなく、智学の導きに真摯に沿うことで原典へと遡っていく慎重な日蓮主義「受容」を示すものであるといえる。

第三章では、賢治の日蓮主義「受容」はその後どのように展開していったのか、という問いを追究した。賢治は1921年（大正10）12月から約4年4ヶ月間に及ぶ農学校教師時代、生徒たちに対して自身の信仰を強く説くことはほとんどなかった。ただし賢治自身は、信仰態度の変容について明言はしておらず、農学校教師時代には国柱会の機関紙『天業民報』（創刊1920年・終刊1931年）に農学校の生徒に向けて作った歌曲の歌詞を投稿している。そこで本章では、1920年（大正9）から賢治晩年の1933年（昭和8）頃までの時期区分に沿って、国柱会と賢治の教育の捉え方がどのような点で異なり、重なっているのか、国柱会の『天業民報』とその後続紙である『大日本』（創刊1932年・終刊1944年）を手がかりを明らかにしていくことを試みた。『天業民報』『大日本』上の教育についての主張と、賢治の教育実践やテキストから看取される教育のあり方とは、「個人」や「国家」という概念をどのように捉えるかという点で相違があるといえる。国柱会の論者たちは、当時の学校教育と密接に結びつく「教育勅語」の存在を重視し「国体的人格」の育成を唱え、個々人よりも「国家」やその先にある「世界統一」に重きを置いた。他方で自然と共に生きる「地人」の道へと眼差しを向けていった賢治の場合、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」（「農民芸術概論綱要」）と述べていた。賢治の発想は、日蓮の一切衆生救済への念願を受け継いだ智学の言説との共有点をたしかに有している。しかし、国柱会の論者や智学の主張が、個の多様性を認めつつも終局的には「国家開導」を、『法華経』によって開顕された「日本国体」による「世界統一」を目指すのに対して、賢治の呈示する教育のあり方では、個人の幸福は世界全体の幸福に従属するものとはなっていない。さらには賢治の述べる「世界」とは、「国家」や「日本国体」以上に、自然科学に基づく生命の連鎖や循環という自然観が重ね合わされた「宇宙」へと広がりを持つものであった。

おたにこうずい

第四章では、賢治の「農民芸術の興隆」に見られる浄土真宗本願寺派法主・大谷 光 瑞 への批判から、賢治と光瑞における仏教と教育思想の関係を対比的に描き出すことを目指した。本章では、1910年代から1920年代にかけての新聞・雑誌史料を用いて、賢治周辺に存在した光瑞批評や光瑞の教育等に関する言説を辿り、賢治による光瑞批判の様相を検討した。賢治と光瑞は、両者ともに仏教や教育、農業に関心を寄せ、それらに関わる実践を志向した存在として共通性を有していた。さらには、仏教信仰に社会的な視点を意識的に含み入れており、信仰を個人の内面で完結させることなく、教育や農業を通して社会の中へ還元しようとした点で重なりを見せていた。しかし光瑞が見据えていたのは、「帝国の前途」、すなわち日本という「国」やアジアの向かう先であった。光瑞においては、西洋列強に対して日本やアジアを富ますことが上位の理念にあり、教育や農業はその下部をなす従属的営為であったといえる。光瑞の考えた教育は、彼の国内外における事業を補佐するため、ひいては国家を富ますためのエリート人材を養成するという意味合いを有していた。こうした光瑞の思想構造では、「国家」という一つの機能的な単位としての共同体のあり方が見られ、そこに生きる個人はあくまで「人材」として存在している。光瑞にとっては、農業や教育などの事業を通じた富国への貢献は、真俗二諦論によって真宗信仰と矛盾なく結びつくものであった。一方で、「国家」や「個」という視点から考えれば、賢治の眼差しは目の前で生きる東北農村の一人ひとりへと向いていたことはたしかであるといえる。さらに賢治の思想には、「個」の尊重と同時に、その「個」が「集団社会宇宙」（「農民芸術概論綱要」）へと繋がるような生命の連関が見られる。賢治のテキストや実践から読みとれる「共同体」概念は、東北農村という顔の見える個々人の結びつきからなる現実的な場に根ざした共同体に、宇宙へと広がりを持つような理念的な共同体のあり方が、二重写しに重なったものと見られるのである。賢治の「教育思想」で重要な点は、共同体の中に生きる一人ひとりの幸福が目指され、教育はその幸福を実現するために行われるものであるところにあった。

第二部「賢治と大正新教育」では、近代仏教の影響から垣間見えてきた賢治の「教育思想」の特徴をなす「個」や「生命」概念について、賢治の教育実践と大正新教育を対照させることでその独自性を浮かび上がらせることを試みた。

第五章では、賢治が関心を寄せていた、岩手県における大正新教育の展開の一面について、盛岡の岩手県師範学校附属小学校と稗貫郡の大迫尋常高等小学校を中心に明らかにした。賢治が岩手県の新教育の旗頭として敬意を表した佐藤瑞彦^{みずひこ}は、同時代の教育動向をふまつつも、彼自身の信念にもとづく自由画・読方教育の主張や実践を展開していた。瑞彦自身の信念とは、図画や読方、綴方等はすべて、「自由意志、自由感情の自由発表」に基礎を据えるものとする考えにあった。瑞彦は、それらが個性ある個々の人間（生命）を作っていくものとする考えの上に立って、お伽噺の読み聞かせや国語副読本の編纂といった試みも行ったのであった。また、瑞彦をはじめとする岩手県師範学校附属小学校で大々的に行われたのは、ドルトン・プランに着想を得つつも、それを学校に合わせて変化させた「自学室」の経営であった。そこでは、教師と生徒がともに協働して研究に励むことが目指され、教室の内外におよぶ自学の取り組みが繰り広げられたのであった。

大迫尋常高等小学校での新教育実践もまた、方法としてのみ新教育実践を取り入れるものではなかった。当時の校長・菅原隆太郎は、成城小学校の実践や小原國芳の講演、さまざまな著作から学びとったドルトン・プランの内容を忠実に取り入れつつ、大迫という地域に合わせた実践へと展開させていった。中でも農学研究室を設置することにより、農会や地域と連携しつつ農業科に力を入れたことは、同校での新教育実践に対する町民からの理解を得る重要な一要素となったものと考えられる。また、同校で自由研究の時間に入る前に心身を鎮めるために行われた藤田式息心調和法の実施は、「自学」の実践が「自らを修むる」とする修養とともにあったことを示していた。その修養もまた、教師と生徒とともに行うものであり、新教育実践のためには教師による絶え間ない修養が求められたのであった。岩手県師範学校附属小学校と大迫尋常高等小学校の新教育実践は、教師と生徒がともに学び続けることを重視し、単に教育方法として新教育を導入するのではなかった点に共有点が見られる。

第六章では、第五章で明らかにしてきた賢治が関心を寄せた岩手県の新教育の実態が、具体的に教育実践にどのように表れているのかを明らかにした。まず、賢治の農学校での教育実践を、岩手県の新教育の展開との関連で捉え直すことを試みた。賢治が農学校での実践にレコード鑑賞や絵画鑑賞などを取り入れていた背景には、賢治が関心を寄せた新教育実践家たちが目や耳という感覚器官にはたらきかける鑑賞に重きを置く芸術教育に力を入れていたことがあった。また、賢治は農学校生徒への自作の童話や詩の読み聞かせを行っていたが、こうした教育的営為には瑞彦らがお伽噺の読み聞かせを学校教育の中で積極的に行っていたこととの関連性が見られる。ただし、賢治の勤めた農学校に入学してきたのは中農程度の農家の14～16歳前後の子弟であり、瑞彦や菅原が教育対象とした初等教育段階の児童とは異なる。次に、賢治は新教育実践と共有する芸術教育を取り入れていたが、思想的な部分では芸術にどのような意味合いを込めようとしたのか、その問いに対する手がかりを得るために親友である藤原嘉藤治^{かとうじ}の教育論を探った。賢治と出会う以前の嘉藤治が作品上に表していたのは、近代文明によって人間が意識できなくなった「宇宙生命」の流れを取り戻そうという呼びかけであった。嘉藤治は自然科学に代表される世界の断片化に疑念をもち、より広い「宇宙生命」の中で個々が生きているとする意識を呼び戻そうとしていたのであった。嘉藤治にとって音楽とは、「宇宙生命」それ自体であり、音楽教育を行うことが子どもたちに自然をその本質とする「宇宙生命」の中で個々が生きていることに気づかせるものとなると考えたのである。賢治は、「農民芸術とは宇宙感情の地人個性と通ずる具体的なる表現である」（「農民芸術概論綱要」）と述べた。賢治が自ら嘉藤治のもとを訪れたのは、嘉藤治による上記のような所論を掴んでおり、共有するところがあったからであると考えられる。両者が意識していたのは、自然や「農」という言葉に結びつく「宇宙」というより普遍的な存在と、その中で個々の生命が生きているとする生命観であった。ただし賢治の場合には、自然科学を斥けるのではなく、宗教を基盤に置きつつも宗教と自然科学の両立を目指していた点に特質が認められる。そこで本章では、あくまで仮説を提示することにとどまるものとして、賢治の農業教育に関係しているであろう盛岡高等農林学校の小林鼎の「教育学」講義について検討を試みた。小林は高等師範学校でジョホノット—高嶺秀夫による教育学を学んでいたものであり、それは、当時のペスタロッチ主義の実物教授が断片的な知識の教授となっていることを批判したものだ。ジョホノット—高嶺は、想像力を最も重要なものとする

「心力開発」を唱えており、教育が断片的な知識の教授に終わるのではなく、心力によって「創造」へと至らせることが可能になることを目指す教育学を唱えていた。

第七章では、賢治はなぜ童話創作に向かったのかという問いを、童話創作の着想の基点としての「下種」の思想に着眼して明らかにした。賢治が日蓮主義研究の過程で触れたと考えられる日蓮一田中智学の説く下種論は、天台本覚思想における現実肯定の思想を前提としていた。それは、あらゆる現実の事象こそが本来的な真理を体现しているという思想である。ただし、日蓮の下種論では、あらゆる存在に潜在的にそなわる仏となる可能性を信頼しつつ、「末法」ではそれは未発であると捉えられ、外部からのほたらきかけが重視された。日蓮は、末法の折伏・下種を不軽菩薩の「但行礼拜」に重ね合わせて見ていたが、折伏とは単なる教化の方法ではなく、『法華経』を信受する人が保つべき態度のことなのである。賢治は、下種論に着想を得ながら、やがて人間による「教え導くこと」の不可能性の自戒へと至った。賢治童話が目指すのは、あらゆる生命の潜在的な仏性を信じ、「真理」の接近へと受け取り手を誘発させ続けることにとどまる。それは不軽菩薩のように、自他なくあらゆる生命の仏性を、この世界そのものの仏性を信じ、ただひたすらに『法華経』の精神をそと届け続けるものである。賢治童話の通底をなす「世界全体の幸福」の探求は、「探求」のモチーフをとるからこそ、開かれた方向性を有するものとなる。キリスト教信仰者・佐藤瑞彦の綴方・作文教育「創作」と対照させたとき、一見すれば瑞彦の人格としての子どもへの信頼と賢治童話の潜在的な仏性への信頼は重なるものに思われた。しかし、「共同体」や「個」の概念に着眼したとき、瑞彦の「創作」の実践と賢治童話は、全く違った様相を見せ始める。賢治童話は、学校や社会という共同体を越え出て、さらにそれらをも包括する「第四次元」に開かれた網目のように連関する「共同体」概念の創造を提示してくる。この新たな「共同体」概念の創造によって、世界全体の幸福の探求が駆動されるのである。賢治童話は、三次元空間の「共同体」概念や、それを存続させるための教育概念を解体してみせる。しかし、眼前の現実から離脱していく方向へと向かわせるのではなく、新たに開かれた「共同体」概念の創造へと人々をいざなうものなのであった。

第三部「賢治と農村」では、岩手国民高等学校から羅須地人協会時代以降へと視線を移し、科学と信仰を橋梁しようとした「農民芸術」論から導出される賢治の「教育思想」の特質を考察した。

第八章では、賢治の「農民芸術」論が生まれてくる土壌となった岩手国民高等学校と、それを取り巻く当時の農村教育の潮流について論じた。岩手国民高等学校は、当時の農村中堅層を養成しようとする農村教育の潮流に位置づけられるものであった。しかし、岩手国民高等学校には、加藤完治らの国民高等学校協会とは異なる特徴が2点あった。第一には、公民教育系の科目が入れ込まれ、社会主義思想対策という意味合いを持たされた点である。第二に、賢治の「農民芸術」講義に見られるように、芸術系の科目が設置されたという点である。本章では、岩手国民高等学校に入れられた芸術系科目が、賢治周辺の花巻の学校教師によって行われていた輪読会との関係性があるのではないかという仮説を強調した。岩手国民高等学校は、当時の農本主義的な「皇国体操」等を取り入れつつ、さらには社会主義思想の対策という役割も担わされながら、講義を担当した賢治周辺の教師たちの間には宗教や芸術について自由に論ずる土壌が育まれていたのである。

続いて岩手国民高等学校の主事であり、農本主義者でもあった高野^{かつじ}一司の農村改良に関する主張と賢治を対照させることで、賢治が行おうとした農村改良の特徴を浮かび上がらせることを試みた。高野をはじめとする農本主義者の主張は、農村を改良するという目標では賢治と共有するところがあったものの、その向かうべき方向性は異なっていた。寛^か克^{けい}彦^{かつひこ}の古神道にもとづく農本主義の発想では、「日本人」たることが強調され、国民と国家は二者一如の姿をなす「表現帰一」の関係であることが示されていた。この論理にもとづき、高野をはじめとする農本主義者たちは、開拓へと乗り出していったのであった。その一方で、賢治が述べる「世界全体」や「宇宙」という言葉は、一見して農本主義者による「表現帰一」の論理と重なるように見られるが、賢治の考える「生命」は、「日本人」ひいては人間というものに括られるものではないことが示された。賢治は、商品作物の製作の試みとして畑の開墾を行ったが、農民たちに対して行った農事指導は基本的には肥料設計が中心であった。土地に手を加え性質を変えるという農芸化学の知識にもとづき、賢治は農村改良を行おうとしたのであった。

第九章では、賢治が眼差しをむけた東北農村の実情にできる限り接近することを試みながら、羅須地人協会時代の賢治の具体的な実践を取り上げ、それが農学校時代の実践とどのように性格を違えたのかを論じた。賢治は、農学校では中農程度の農家の子弟に対して教育活動を行ったが、羅須地人協会時代には小作農や貧農をも相手として農事指導を行った。羅須地人協会での活動には、新教育思想との関連性も見られる「自学」的な取り組みも行われていた。ただし、そうした取り組みは、農村に生きる個々人の生活を少しでも向上させようとする切実な望みから行われるものであった。しかし、賢治の感受していた農民層との壁は、宮沢一族の生まれであるという出自によって取り払うことのできないものとして賢治の目の前に横たわっていた。稗貫郡や和賀郡は立憲政友会が強力な地域であり、宮沢一族はその後援者として大きな役割を果たしていた。さらには賢治の父方の叔父・宮沢恒治は、1929 年（昭和 4）に社会民衆党の代議士候補として起てられたのであった。この点についてはさらなる調査を期せねばならないため慎重に述べるしかないが、結果的に恒治が社会民衆党の代議士にはならなかったのだとすれば、宮沢一族と立憲政友会の結びついたこの地域の政治的状況を動かすことの難しさを表していたといえるかもしれない。賢治の述べる、「そのまっくらな巨きなもの」（「境内」）とは、地主小作関係という土地制度の問題だけではなく、政治的な状況とも深く結びついたものなのであった。他方で、農民の中には社会主義思想へと足を踏み入れつつある人々もいたのであった。賢治は、労働農民党稗貫和賀支部への物資や金銭の支援をしつつ、目の前に横たわる社会の分裂を嘆いた。賢治は実際に小作農や貧農と呼ばれる人々と接する中で、農民との距離を自覚するに至ったのだと思われるが、しかし、それでもなお、岩手農村という社会的・政治的に動かし難い現実を前に「一人ひとりの幸福」を目指しながら賢治は農村教育活動へと励み続けたのであった。

第十章では、賢治による「農民芸術」論の背景にある、日蓮主義的『法華経』理解の影響を明らかにすることを試みた。賢治の「農民芸術」講義に見られる仏教用語を用いた解説は、たしかに日蓮遺文を意識したものであったことが推定された。「世界のまことの幸福」を求める道は、「菩薩行」、すなわち他者をも導く実践的な修行によって行くよりほかに仕方がないのである。その菩薩は初めに四つの誓願を立てるが、第一のあらゆる衆生を迷妄の世界から悟りの世界へと導き入れようとする誓願が成就しなければ、第四の自らが無上菩提に至ろうとする誓願も叶わないのである。

次に、「銀河系を自らの無意識として自覚しこれに応じて進むことである」や「新しい即ち創造は無意識部から生ずるのである」（「農民芸術」講義）という言葉に表れた無意識とは、日蓮や智学が重視した、最も根源的な第九識を捉えたものであったことが推測された。この第九識は、一切のけがれの無いすべての根源となるものであるが、智学はこれを「事の一念三千」の根本に置くことを主張した。その「無意識部」（一第九識）は自然科学的な「真空」と重ね合わされつつも、そこから事物が生起してくる場であると考えられていた。そこに「銀河系」という言葉で表される宇宙へと広がりを持つ個々の生命を含み入れることを自覚することで、「第四次元」の芸術なるものが創造されてゆくのである。賢治の「教育思想」は、「銀河系」を自らの中にも含むことで新たな開かれた「第四次元」の幸福を探求する生命のあり方を呈示しているのだと考えられる。そうした生命のあり方は賢治の呈示によって一度きりで終わるのではなく、地涌の菩薩が『法華経』の精神を人々に届ける存在であるように、「銀河系を自らの無意識として自覚しこれに応じて進む」（「農民芸術」講義）という生き方を自らも持ち、さらにそれを他者に伝えてゆくような存在たることが受け取り手にゆだねられているのである。『法華経』で説かれる「地涌の菩薩」のあり方が、「農民と云はず地人と称し／芸術と云はず創造と云ひ度いのである」（「農民芸術」講義）と述べたときの「地人」という言葉の意味に込められていると見えるのである。賢治の「農民芸術」論は、自然科学と宗教を橋梁する方法を求め、〈対・近代文明〉や〈対・ブルジョアジー〉を越えた、新たな文化である「第四次元の芸術」を創造することを呼びかけたものなのであった。それは宗教と科学の単なる両立ではなく、自然科学の力を個々の幸福のために用いつつも、科学に橋梁され得るあらゆる生命にそなわる「心の力」（「真空」）を信じて、そこにはたらきかけることを試みるものであったといえる。

賢治の「教育思想」とは、「銀河系」へと広がりうる生命の連関を自己の中にも含み入れ、この現実世界の中で個々の幸福を目指して実践へと打ち込む、地涌の菩薩に重ね合わされた「地人」という生命のあり方を、そっと人々の心に届けゆくことで「第四次元」の新たな文化を創造しようと呼びかけるものであったと描出できるだろう。賢治の「教育思想」は、「第四次元」を呈示するものであったからこそ、近代学校教育という枠組みを包摂しながらもそれを越え出ていき、戦前にありながらも「国家」や「国体」という共同体幻想をも解体し、そしてそれらを越えた新たな文化を構築していく可能性を有するものであったといえる。ただし、賢治自身が「国家」や「国体」を強調しない思想構造を有していたにしても、賢治という存在が農本主義の文脈で支持されていたことは指摘しておくべき事実である。重要なことは、賢治が童話作品に込めた、不軽菩薩の姿に表れた「末法の折伏・下種」を基底とする「世界全体の幸福」への探求は、あくまで「探求」のモチーフをとり続け、これから創造されゆくものであるという点にあるといえる。賢治の童話や詩は真理への接近を誘発しつつも、真理を直接的に提示するのではなく、そこには多様な解釈が入り込む空隙が存在している。換言すれば、たとえば国家主義や農本主義、ないしは国体主義に対置されるような主義や思想を直接的に提示するのではなく、「第四次元」の共同体の創造へと人々をいざなうことにとどまっているのである。賢治の「農民芸術」は、そこから事物が生起してくる「真空」ともいえるべき「心の力」を重視するものであり、そこには空間的余地が存在している。だから

こそ、賢治のテキストは戦時下において農本主義的な文脈でも用いられた歴史的事実を生み出したのだと考えられる。これは、賢治の「教育思想」に孕まれた両義性であるといえる。

あらゆる生命の本来的な性質を信じて外部からはたらきかける発想は、たしかに大正新教育との思想的な関連性を有している。しかし、とりわけ佐藤瑞彦との対照で見えてきたのは、大正新教育の鍵概念である「生命」や「個（個性）」という概念に対して、賢治の「教育思想」は新たな意味付与を行いうるものであるということである。先述したとおり、賢治の捉える個々の「生命」には人間だけではなく山川草木までもが含まれ、それは「銀河系」へと広がりを持つはてしない時間と空間を越えた連関の中にあるものである。こうした生命の連関を、賢治は「第四次元」として呈示するのである。こうした「第四次元」の世界の創造へとあらゆる存在を駆動させる賢治の「教育思想」は、国家といった三次元空間の共同体やそれを存続させようとする組織的・意図的な「教育」をいったんは解体し、新たに構築し直すことへといざなう。すなわち、いったんは何もない科学的「真空」へ、そしてそこから事物が生起する仏教的「真空」へと、我々を導き続ける。賢治は、あえていわゆるテキスト化された輪郭の明瞭な教育思想なるものを作ろうとはしなかった。それは、真理をそのままに明示しないことで、賢治の「教育思想」の受け取り手を「第四次元」の芸術という新たな文化の創造へと駆り立てるものだからである。

賢治の「教育思想」は、結び目の宝珠同士が互いを無限に映し合うことで輝きを増していく「インドラの網」を、時間軸を越えて「銀河系」の中につむぎ出していくことを呼びかけている。「第四次元」という新たに開かれた一種の「共同体」概念への探求は、「永久の未完成これ完成なり」（「農民芸術概論綱要」）という言葉で表されるように、「永久の未完」であることに意味があるのだ。それは、絶えず三次元空間に生きる我々の「共同体」概念を、「教育」概念を、包摂しながら超越し、揺るがし続ける。一方で、「世界全体の幸福」を「銀河系」の中で求める旅路は本来的に孤独であるとされている。「第四次元」の「共同体」概念は、三次元空間の共同体のように目に見える空間を共有するものではないために、国家という共同体幻想を生じさせることをはばむのである。自然科学と橋梁される「心の力」なるものを信じて、その中に「第四次元」の「共同体」を拓いてゆくことが、「世界全体の幸福」の探求に向けた現実世界での実践へとつながってゆくのである。いわゆる共同体概念となることをはばみながら、しかし個々が連関し合う生命のあり方を呈示し続けるところに、「第四次元」という言葉に表出される賢治の「教育思想」が三次元空間の教育概念を広げてみせる可能性を我々は見てとることができるのである。